PROJECT

不確実性の人類学に向けて

文
碇　陽子

共同研究 ● 確率的事象と不確実性の人類学──「リスク社会」化に抗する世界像の描出（2015-2018 年度）

本共同研究は 2015 年 10 月に始まり、現在までに 2 回の研究会（2015 年 11 月 14 日と 15 日、2016 年 2 月 6 日と 2 月 7 日）を開催した。まだ始まったばかりであり、研究成果を報告できる段階にはないため、本稿では、共同研究の来歴、そして、2 回の研究会で出てきた問題関心などを交えながら、「不確実性」についての共同研究の今後の展開可能性について述べたい。

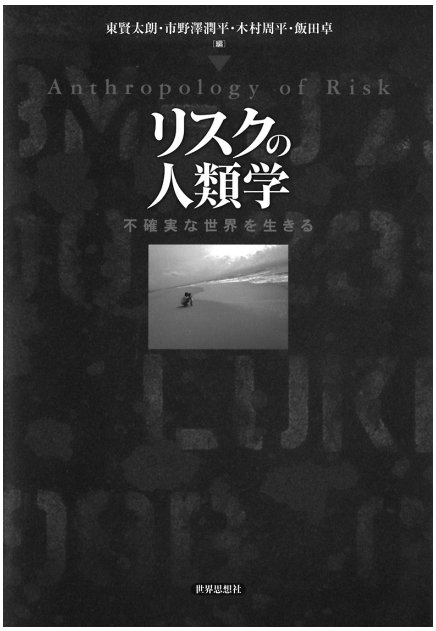
まず本共同研究の来歴を説明しておきたい。本共同研究は、平成 20–24 年度民博共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」（以下リスク研究会）が土台となっている。リスク研究会は、研究成果として『リスクの人類学──不確実な社会に生きる』東賢太朗／市野澤潤平／木村周平／飯田卓編（世界思想社 2014 年）を出版した。その後、リスク研究会のメンバーの一部が有志で、2013 年から「不確実性」に関する勉強会をスタートさせ、2015 年度に市野澤潤平（宮城学院女子大学）を代表とした本共同研究「確率的事象と不確実性の人類学──「リスク社会」化に抗する世界像の描出」が採択された。本共同研究のメンバーは、前身のリスク研究会メンバーのうちの 5 名に、新規 8 名を加えて、計 13 名でスタートした。

リスクから不確実性へ

現代は「リスク社会」であるといわれる。原子力発電所の事故や化学物質の大気汚染に見られるように、科学技術の発展が予想もしないような危険性を生むという時代認識は、2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災と、それに続く福島第一原子力発電所事故によって、決定付けられた。一方で、科学技術の発展や確率・統計の進展による不確実性の制御・管理の仕組みは、ますます経済や医療などの制度設計の大きな支えとなりつつあることはいうまでもない。

社会学では、こうした現状に対し、1980 年代以降ウルリッヒ・ベックを代表とするリスク社会論が台頭し、リスク社会化が世界に浸透していく事態を描き、隣接領域に大きな影響を与えてきた。本共同研究の前身のリスク研究会においても、各地の事例を通じて、あらゆるリスクが可視化され自己責任として引き受けさせられるリスク化が世界に波及し、社会・経済・政治の制度の骨幹が、人びとを徹底的にリスク・コンシャスにしていく（リスクへの意識を強く深く内面化していく）「リスク社会」の実態が明らかになった。

とはいえ、リスク研究会で同時に明らかにされたのはそれだけではなかった。リスク社会論の時代診断が大筋では当たっているとしても、人びとの生活実践をミクロに見ていくと、かならずしも、かれらの思考や行動がリスク管理のシステムに侵食されているというわけではなかった。つまり、リスク管理の技術や制度に回収されえない「残余の領域」の存在の大きさを、各フィールドの事例を通じて認識するに至ったのだった。「残余の領域」とは、たとえば、リスク管理を追求すればするほどリスク管理が究極的には不可能であることが露呈することや、そもそも、リスク管理をする人間がリスクを徹底的に内面化した合理的な主体とはなりきれない存在であることなど、リスク管理の技術や制度に回収されえない領域を指す。4 年間のリスク研究会を終えて、一部のメンバーは、そうした「リスク社会」化に抗するような動きを丹念に拾い上げ、様々な相貌の不確実性を捕捉していく必要性を強く感じた。



本研究会の前身の研究会「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」（平成 20–24 年度民博共同研究）で出版した書籍。

不確実性の射程

いうまでもなく、人類学は、従来、「伝統社会」を対象に、それらの社会にたびたび訪れる不幸や災いなど、確実な世界を撹乱するような不確実な状況に対し、人間がどう向き合うのかについて描いてきた。人間の不確実な状況との関わり方を、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を通して議論してきたという意味では、人類学には独自の不確実性研究の系譜があるといえる。

現在、欧米を中心にした人類学で展開されているリスク・不確実性研究は、この人類学独自の不確実性研究の系譜を継ぐのではなく、社会学のリスク社会論の潮流にのる形で急拡大しつつある。これらの研究においては、リスク・不確実性についての一般的な理解としては、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする今日の潮流を新たな考察対象としている。たとえば、地球温暖化や原発、地震、テロ、鳥インフルエンザなど、計算不能かつ予測不可能で、起きてしまった場合に甚大で破滅的な影響と被害をもたらす不確実性をどう把握・評価し統治するかという問題系に大きな関心が集まっている。

こうした社会学や人類学が提示する「リスク社会」的な世界像には、不確実性が常態となり、個々人は専門知を積極的に取り入れ、再帰的に自己の日常生活の行動を選択し意思決定せねばならなく

なるというストーリーが前提とされている。しかしながら、筆者を含む共同研究のメンバーは、この前提に違和感を持っている。まず第一に、不確実性ははたして常態となりつつあるのかという点。そして、もう一つが、不確実性はたんに対処し制御されるべき対象としてのみ扱われてきたのか、という点である。

自明のことだが、われわれの日常生活の大半は確実性に支えられている。安定的で確実な世界を基盤にして生活しているからこそ、われわれはある程度平穏に生きていくことが可能なのだ。われわれの生活を支える確実性の成り立ちは本質的に無根拠であり、その自明性ゆえに明確に説明することは難しい。人類学者は、他者の文化社会を通して、その自明性（＝確実性）と、そして、それらが失われる状況（＝不確実性）を説明してきたといえる。不確実性という視点から現実を把握するためには、そうした事実を知っておく必要がある。ところが、リスク社会論的な考え方は、われわれの生活を支える確実性を不問にしながら、われわれの社会は不確実性が卓越しているという了解のもと、それを制御不能な恐ろしい事態として論じる。

「マンタ待ち」の様子（2016 年 1 月、タイ、シミラン諸島、Bas Jirawat Deeraksa 撮影）。

しかしながら、安定的で確実な世界に、それが成立しない状況が生じることを不確実性とするなら、その領域に多様な実践が存在することがわかる。たとえば、現実の日常生活のなかでは、不確実性のなかに未来の希望を見出したり、不確実性を資源化し、不確実性それ自体を楽しみに結びつけるような実践もある。上述したような確率・統計の技術に回収されえない根源的には手を触れることのできない領域は（それをわれわれは「残余の領域」と名付けたが）、制御不能な恐ろしい未知の領域としてのみあるのではない。そこには、不確実性が資源化され創出されうるような局面も含まれるはずだ。本共同研究では、こうした視座を持つことによって、人類学独自の不確実性研究に貢献できると考えている。

第 2 回共同研究会では、近藤英俊（関西外国語大学）と市野澤による事例発表を通して、不確実性のこうした側面が議論された。両名とも、「偶然性」という領域から不確実性を紐解いていこうという問題意識を共有している。

近藤は、病や死別、災害など、人間の生の辛い状況を苦境状況と呼び、苦境状況の人間の生き方を論じた。苦境状況においては、これまでの確実な世界が崩れる。そして、未来の見込みも立たないような苦境状況で、当たり前の現実に存在した必然性が失われ、現実が偶然性を帯びてくる。そうした状況で、偶然性を払拭するのではなく、まるで完結しない物語を転々としたり、あるいは逆に偶然性に神秘的必然性を感じ取り、偶然性とともに生きていくような生き方がある。近藤は、そうした心情や態度が、不確実性のなかに見出されるのではないかと問う。

市野澤は、タイの観光ダイビングでマンタを見るための「マンタ待ち」に伴う不確実性が、いかに楽しみと結びつけられながら資源化されているかについて事例発表を行った。「マンタ待ち」だけでなく、オーロラツアーやサファリツアーなどを含むワイルドライフ・ツーリズム全般にいえることは、ワイルドライフの管理が難しくその観光が不確実性をはらむということだ。市野澤の事例では、運の善し悪しだけでなく、賭博化という過程を演出することによって不確実な世界をあえて作り出し、「マンタ待ち」という行為自体が（たとえマンタを見られなくても）楽しい経験となるようなダイビング観光が紹介された。共同研究のメンバーからは、客の安全管理をしながら（リスク管理）、どう楽しませるか（不確実性）というように、安全管理と楽しさは関連しており、そのことが遊びの価値を高めたりするのではないかという新たな意見も出された。

おわりに

リスク社会論では、未来の不確実性やリスクを縮減し、問題を解決するという合理的な人間像が描かれてきた。しかしながら、科学技術の進歩がもたらす不確実性を排除しリスクを管理するという、科学的で合理的な志向が強まるにつれ、同時に、不確実性やリスクを完全に管理し排除することが原理的には不可能だという事実も露呈しつつある。そうであるならば、未来は操作可能であるということと、未来は根本的に非決定的で開かれているという 2 つの現実に、人びとは、これからどう直面していくのだろうか。

本共同研究では、不確実性をめぐる各フィールドの実践の事例をもとに、不確実性の人類学的研究の土壌を作りながら、より豊かな議論を展開していきたいと考えている。

いかり ようこ

金沢大学先端科学・イノベーション推進機構博士研究員。専門は文化人類学、アメリカの肥満／ファット研究。論文に「『ファット』であることを学ぶ──アメリカ合衆国のファット・アクセプタンス運動における情動的関係から生まれる共同性」『文化人類学研究』第 16 巻（2015 年）、「オルタナティブな世界の構築──アメリカ合衆国のファット・アクセプタンス運動を事例に」『リスクの人類学──不確実な社会に生きる』（世界思想社 2014 年）など。